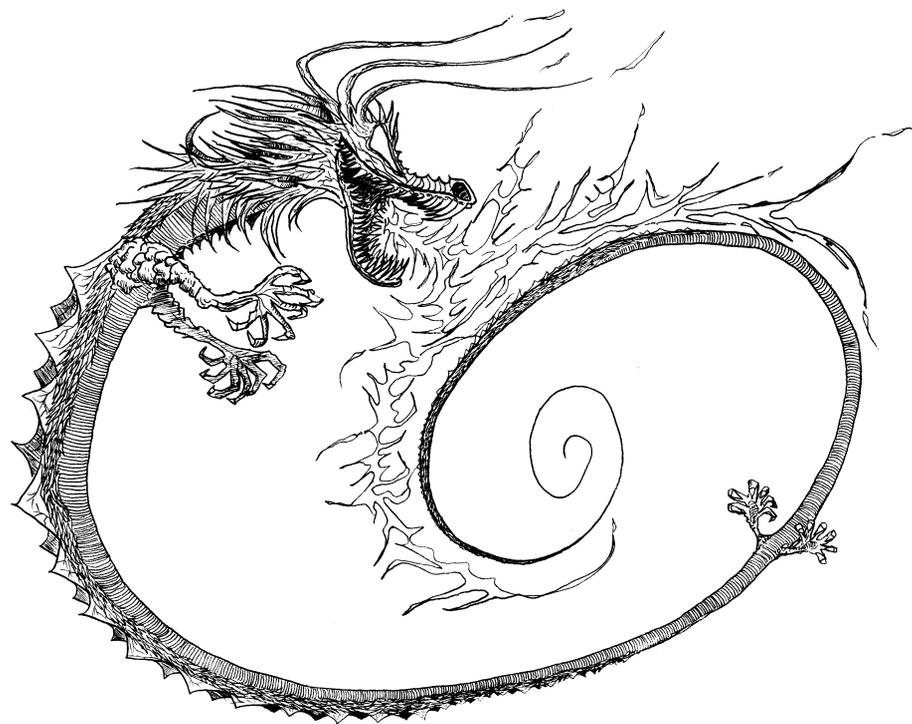


後天動因図

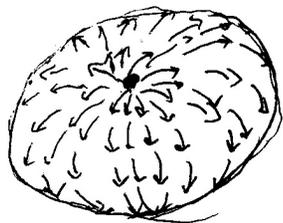


目次

1	導入	3
1.1	後天動因図	5
1.2	差異	7
1.3	生命	9
1.4	四象	11
1.5	八卦	13
1.6	母体 <small>マトリクス</small>	15
1.7	先天数	17
1.8	先天図・後天図	19
2	旅	21
2.1	先天球	23
2.2	トーラス	25
2.3	父母	27
2.4	家族	29
2.5	旅	31
2.5.1	天地	33
2.5.2	旅路	35
2.5.3	展開	43
3	結び	45
3.1	応用	47

3.2	フラクタルに折り畳まれる	49
3.3	フラクタルに展開される	51
3.4	付録	53

1 導入



本書に書いてあることは抽象的なお話です。

具体性は日常生活に基づいています。

抽象は具体性に枠組みを与えます。

この枠組みは日常生活の目まぐるしさに比べれば変化は少ない方だと思います。

この枠組みに関するお話が本書の主題です。

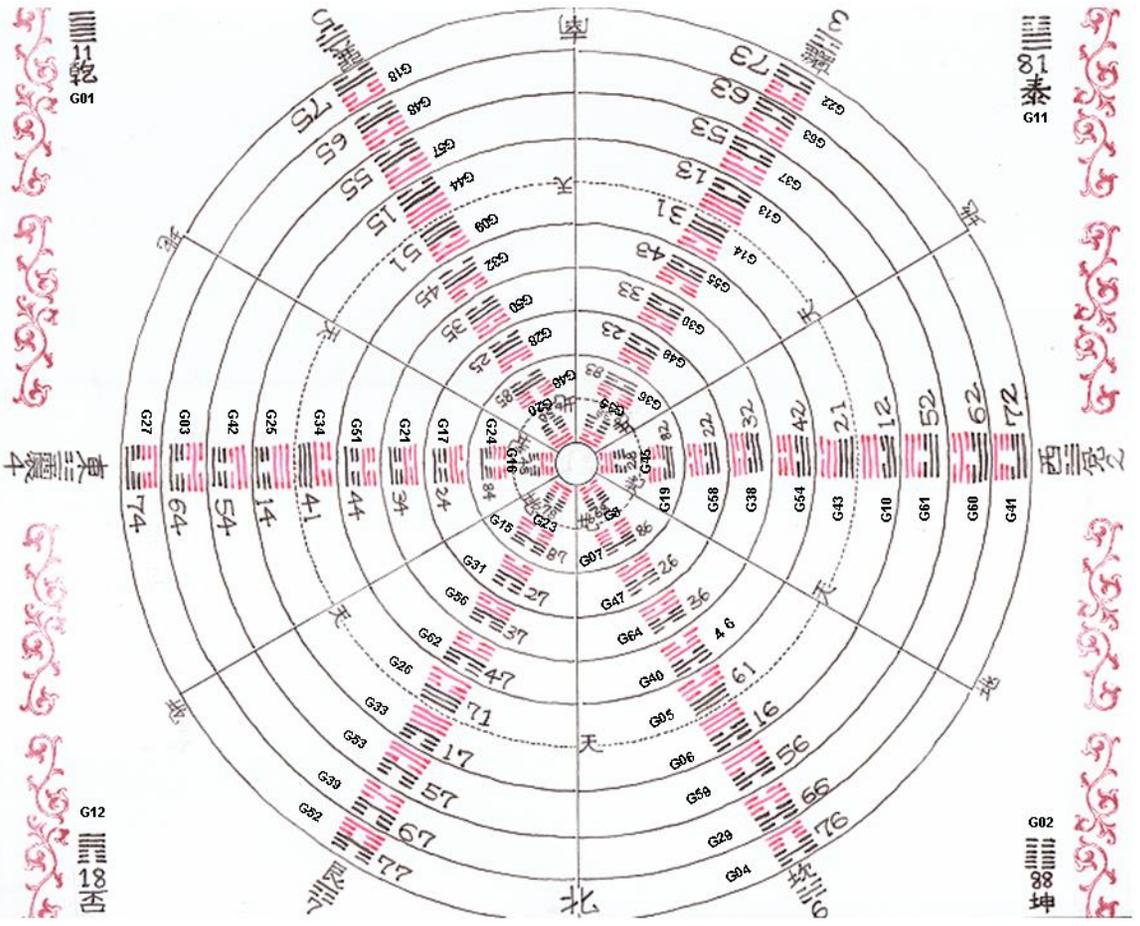
もし本書を何かの役に立てようとするなら、枠組みに日常生活に応じた具体的なものをあてはめる作業が必要になります。

なにをどうあてはめるかは読者の自由です。

たとえば占術では、出てきたカードの絵柄や出生時の惑星の配置、その時水晶玉に浮かんだイメージといった枠組みに、質問の回答を具体的にあてはめようとしています。出てきたカードや惑星の配置やイメージを、ただ眺めていても埒はあきません。千差万別の質問に応じて読み解く必要があります。読み解く、あてはめる、という作業がすなわち占うということです。占術同様、日常生活上でこの枠組みを生かそうとするなら、具体物をその枠組みに充填する必要があります。具体物はそれこそ森羅万象ですから、そのすべてを一冊の本で説明することはできません。そんなわけで本書では抽象的な枠組みのみ記すことにしました。具体的応用は現場にいる読者の仕事になります。

これから先、天や地や、父や母、長男や長女、家族といった言葉が出てきますが、こういった言葉は現実のそのものまたはその人をあらわしているわけではなく、純粹に抽象的な枠組みだと思ってください。

もっとも現実のそのものや人、たとえば、父、母、長男、長女をあてはめて、本書に書いてあることを応用してはいけないということでもありません。そうしてはいけないことはありませんが、それがすべてではないということです。



䷀ 11 乾

䷁ 18 坤

䷁ 18 坤

䷀ 11 乾

1.1 後天動因図

上司への報告でも何らかのプレゼンでも、結論を最初にもってくるのは定石とされているようです。そこで本書でも結論を最初に持ってくることにしました。左の絵がその結論です。このマンダラは易の言葉で描かれています。

易（周易¹）というのは中国の古典で占いの書です。易の中には切れた線またはつながった線を重ねて作った符号があつて、この符号を本書では易卦（えきか）と呼びます。切れた線またはつながった線は爻（こう）と呼ばれ、切れた線は陰、つながった線は陽をあらわします。

爻三つでひとつの易卦をつくった場合は、ひとつの爻は陰または陽をあらわしますから、この易卦には2の3乗で8つのパターンがあることとなります。このことからこの易卦を八卦（はっけ）と呼びます。八卦はまた小成卦（しょうじょうか）とも呼ばれます。左のマンダラでは円の外側にある「4：震（東）」、「7：艮（東北）」などがこの八卦です。

八卦がふたつ合わさるとそのパターンは8×8で64パターンになります。爻6つでできたこの易卦は大成卦（だいじょうか）と呼ばれ、それぞれに卦名（かめい）と呼ばれる名前がつけられています。左のマンダラでは四隅に描かれた大成卦の下の「泰」「坤」「乾」「否」などが卦名です。同心円の中にある大成卦の卦名は省略してあります。各大成卦にふられた11～88の番号は、八卦に1～8までの番号をつけて、大成卦中の上の八卦（これを上卦（じょうか）という）を10の位、下の八卦（これを下卦（げか）という）を1の位として組み合わせたコード番号です。G××とある番号は、伝統的な易における64パターンの並び順を示したものです。

いったいそれがなんだ、という話ですが、まずは左の絵は円の中心から外側の六方向に向かって絶え間なく起こる旅の図だと思ってください。このマンダラでは中心の地から真ん中の天を経て、最外周の地へと再び戻るプロセスが表現されています。後述しますが（43ページ）中心の「地」と書かれている円と外周の、やはり「地」と書かれている円は同じ場所です。

絵は静止していますが、すべては運動していると想像してください。その運動がすべての事象を起こす内なる動機になっています。このマンダラが結論です。ここから先はこれがなぜこのように描かれたかという説明になります。最終的な意味づけは読者にゆだねられています。本書ではこのマンダラを「後天動因図」と呼ぶことにしました。

¹本書で単に「易」または「伝統」という場合は、すべて周易、および周易周辺の伝統を指すものとします。



1.2 差異

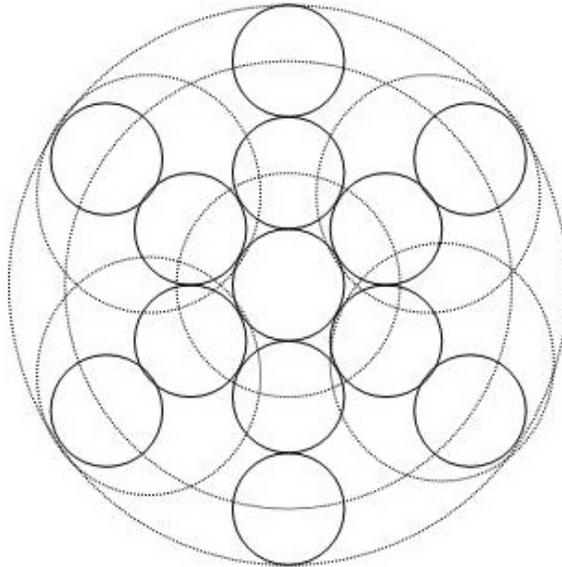
易では陰は女性、陽は男性としてとらえられることが多いようです。そのとらえ方がすすむと「易は二元的」という評価が固定化します。本書ではそのようなとらえ方はしません。男性原理、女性原理は確かにその内に含まれますが、この宇宙の在り様は男女の二元固定ではなくはるかに多様であり、男——女間にさまざまなグラデーションがあるとしてもおかしくはないでしょう。後天動因図が表現しようとしている自然の内在力は、その多様性に優劣をつけることなくあらゆる方向に広がっていきこうする傾向を元来有しています [2] [3]。

符号的にはひとつの爻はふたつの状態しかあらわすことができません。その意味では確かに「二元的」です。しかし爻を組み合わせることにより、on——off、1——0、光——闇、陽——陰、男——女……間の多様なグラデーションを及ぼすながらも表現することができます。爻があらわすふたつの状態を、男性、女性と決めてかかることをせずに、周囲の平均的状态からのズレ——差異の表現であるにとらえたらどうなるでしょうか。ふたつの状態ですからそこには基準軸が必要です。その基準軸上に定めた基準点からひとつの方向への差異を陽、反対の方向への差異を陰としたら？易では陰は陽へ陽は陰へ反転する可能性を常にはらんでいるものとされます。万物は変化しその変化の原動力がこの陰陽の反転として説明されます。上述のように陰陽を差異としてとらえるなら、陰陽の反転は基準軸の反転または、基準点や基準そのものの変更と観ることができます。基準軸はひとつきりではありません。視点の数だけ無数の基準軸が想定されるでしょう。すべては相対的なのです。

そのように観ていくとこの宇宙は無数の差異で満たされているということができると思います。ある場所では陰から陽へ、また別の場所では陽から陰へ。不断の運動は総体的に観るとまったくとらえどころがありません。総体的に観てまったくとっかかりがないということは、ほぼ「なにもない」と同じことです。

さてもしあなたがこの宇宙だったらどうするでしょう？

ここで「なにかを認識しよう」とすれば、複数の差異をまとめてさまざまな単位としてとらえ、組み合わせようとするのではないのでしょうか。



Flute Of Life

1.3 生命

認識とはなんのでしょうか。どういう意味で認識という言葉を使えばいいのでしょうか。

認識することを物事をとらえ識別することであるとするなら、とらえるための仕組みが必要です。

この、認識するということを実現する仕組みが、生命だったとしたらどうでしょうか。

生命の存在意義は、物事をとらえ識別するという機能そのものだったとしたら？

その仕組みには世界観という枠組みが含まれることでしょう。ヒトにはヒトの世界、イヌにはイヌの世界、アメーバにはアメーバの世界、各々の生命は各々の特質に従った世界観を持っているというわけです。

ここで、認識される側の客体（物事）と認識する側の主体（各々の生命の世界観）の分離が起こります。

生命があつて初めてそこに、生命によって、主体（みるもの）と客体（みられるもの）が分けられるというわけです。

主体、客体は生命があつてはじめてたちあがる概念ではないのでしょうか。

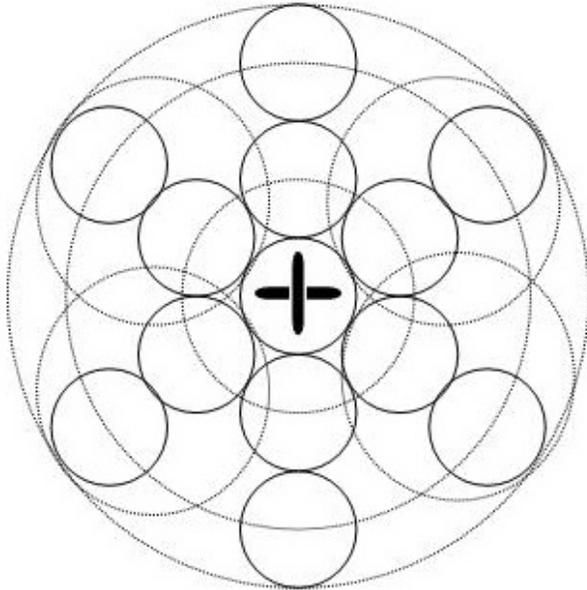
さて、いろいろ考えると、生命現象はこの宇宙が宇宙自身を認識するための仕組みともいえそうです。

その宇宙で、生命が認識するものには光や物質、さまざまなものがありますが、ある生命が別の生命を対象として認識することも当然あるでしょう。生命が別の生命を認識した際に、一定のパターンとして認識されることがあります。

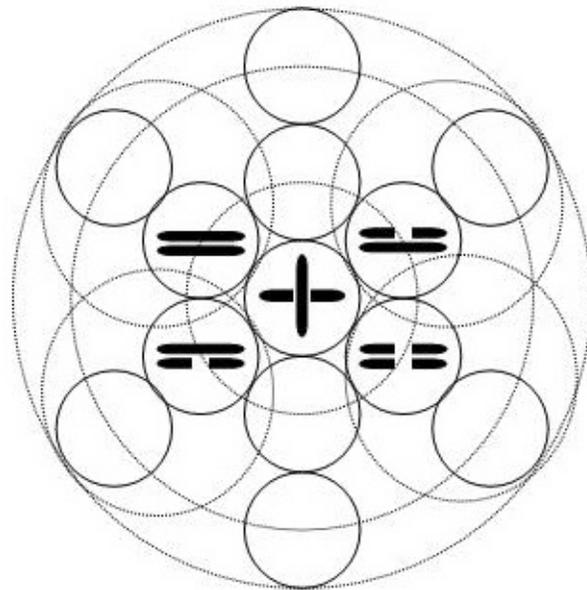
爻が集まってできた単位（易卦）もそのパターンですが、Flute Of Life(以降「FOL」) [5] [6] もそういったパターンのひとつです²。

本書では FOL を爻より基本的なレベルのパターンとして、爻をとりまとめる設計図として観たてることになりました。

²ある生命が別の生命でなく、自分という生命を観た場合、その生命は自分で自分の内側をのぞきこんでいることになります。FOL や易卦は自身の内側にもあるパターンともいえそうです。

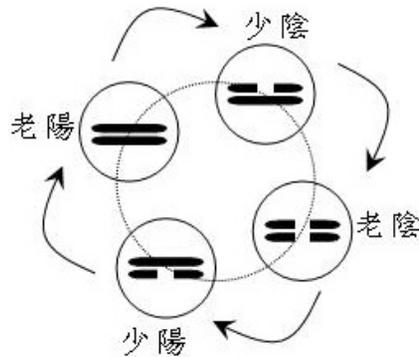


FOL



FOL

1.4 四象



爻がふたつあつまってできた単位を四象（ししょう）といいます。爻ひとつは陰または陽どちらかの状態をあらわすので四象があらわすパターンは 2×2 で4通りになります。文字どおり四つの象（かたち）です。

陰陽の同性どうしは反発し異性どうしは引き合います。この力によって集合離散という運動が起きますが、この力とは別の力で四象は形作られます。この別の力はFOLによってもたらされる力です。

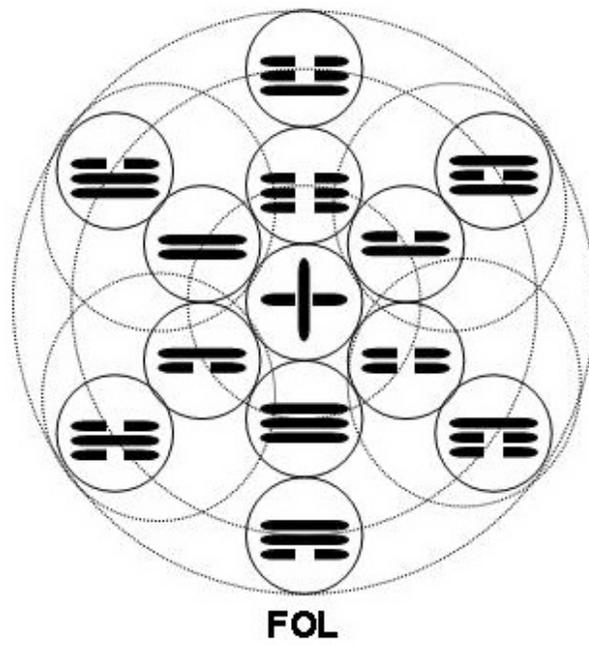
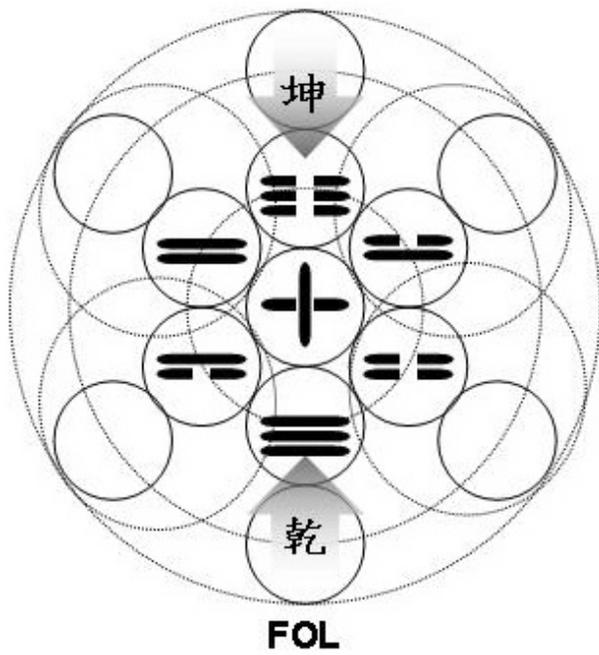
四象が形成された段階で原初的な周期が発生します。

両方とも陰爻でできた純陰（老陰）と、両方とも陽爻でできた純陽（老陽）の間に、老陰→老陽、老陽→老陰へ向かうそれぞれの間状態が現れます。

老陰→老陽へ向かう間状態を陰中陽（少陽）といいます。陰爻の上に陽爻が乗った象（かたち）です。基本はまだ陰なのですが、陽の兆しが見え始めた段階です。

老陽→老陰へ向かう間状態を陽中陰（少陰）といいます。陽爻の上に陰爻が乗った象（かたち）です。基本はまだ陽なのですが、陰の兆しが見え始めた段階です。

こうして老陰→少陽→老陽→少陰→老陰→……という周期ができあがりますが、表現としてはまだ荒削りで日常生活とともにあると想定されているような、なめらかな時間の流れを表現できるには至っていません。



1.5 八卦

ひとつの易卦に含まれる爻（差異）の数が増えれば増えるほど、その易卦は複雑さを増していきます。その差異は全陰（純陰）か全陽（純陽）かだけではなくて、中間のグラデーションの種類も増えて表現はより豊かになっていきます。

陰（純陰）と陽（純陽）は、差異を示すポイントとして基準軸の両端にあつて基準軸を構成します。

基準点（ゼロポイント）は常にその軸の中間にあります。

本書では、基準軸をつくるアンカーとしての差異である陰陽（純陰、純陽）を他の八卦より少し重く観ることにしました。そんなわけで、陰の爻3つでできた純陰の八卦である坤（こん）と、陽の爻3つでできた純陽の八卦である乾（けん）は、他の八卦よりFOLの中心に近いところに位置しています（左ページの左の絵）。

易では坤は、女性原理、母、大地とされ、乾は、男性原理、父、天とされています。

一口に生命といっても、そこには想像を絶する形態、想像を絶する構造、想像を絶する複雑性をもったものがあるはずで、その数、バリエーションはそれこそ想像することすらできないでしょう。

ただ残念ながら複雑性は各々のレベルで崩壊に至る病理を必ず含んでいます。積み上げられた積み木と同様、高くなればなるほど、すなわち複雑性が増せば増すほど、積み木が崩れること——崩壊に至るエラーが混入する可能性は増します。

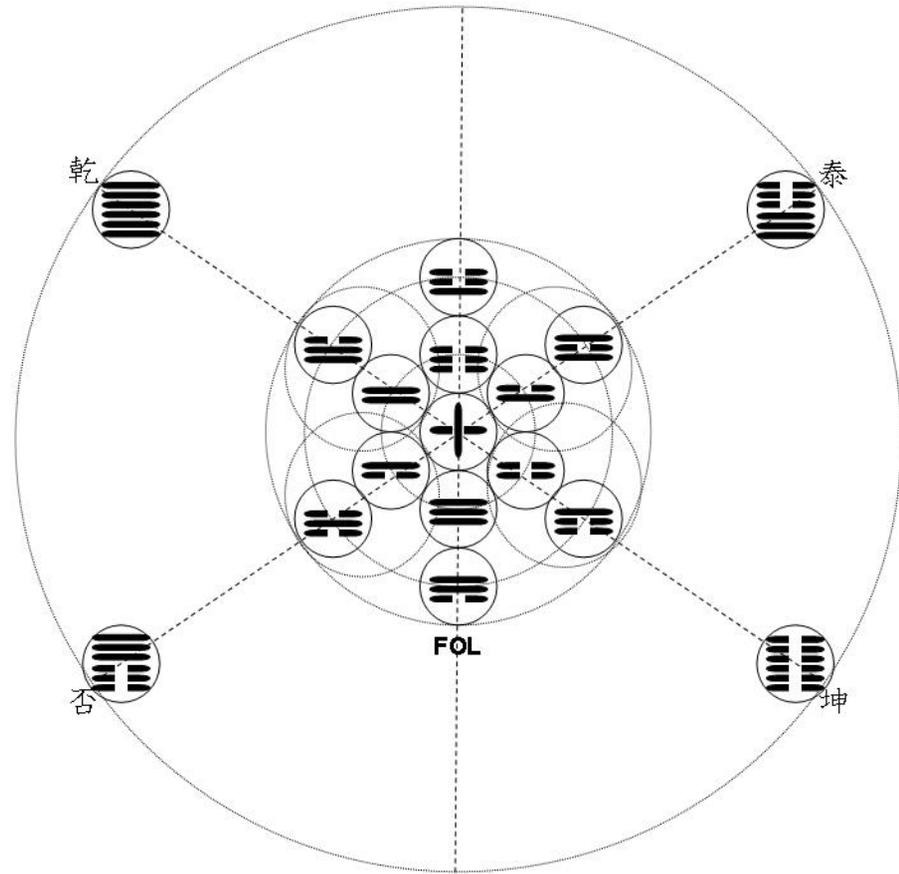
しかしそれでもなお総体的な傾向として、この宇宙は差異という積み木を積み上げた生命のような仕組みを、より高く積み上げようとしているように観えます。

なぜでしょう。

ひょっとして理由などないのかもしれませんが。

でも、一番上の積み木からの視点が高くなればなるほど、より遠くまで見渡すことができるのは確かなようです。

十分に高くなればきつと、水平線の向こうを観ることができるようになるでしょう。

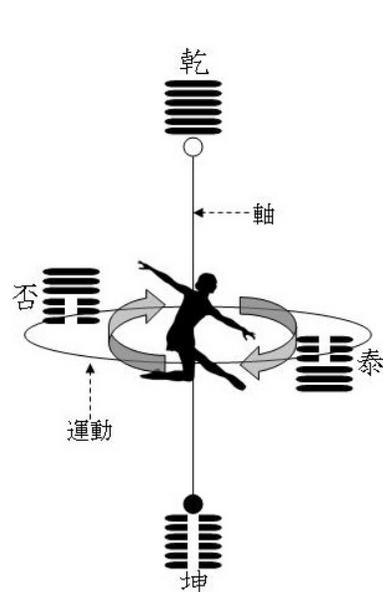


1.6 ^{マトリクス}母体

13 ページで純陰と純陽を他の易卦より多少重く観るといってお話をしましたが、同様に八卦における純陰、純陽である「8：坤」と「1：乾」を重ねてできる大成卦も、他の大成卦よりも多少重く観ます。この大成卦には4パターンあり、左の絵ではその4つの大成卦を FOL の外側の四隅に配置しました。

この4つの易卦は FOL が浮かぶ海を象徴します。

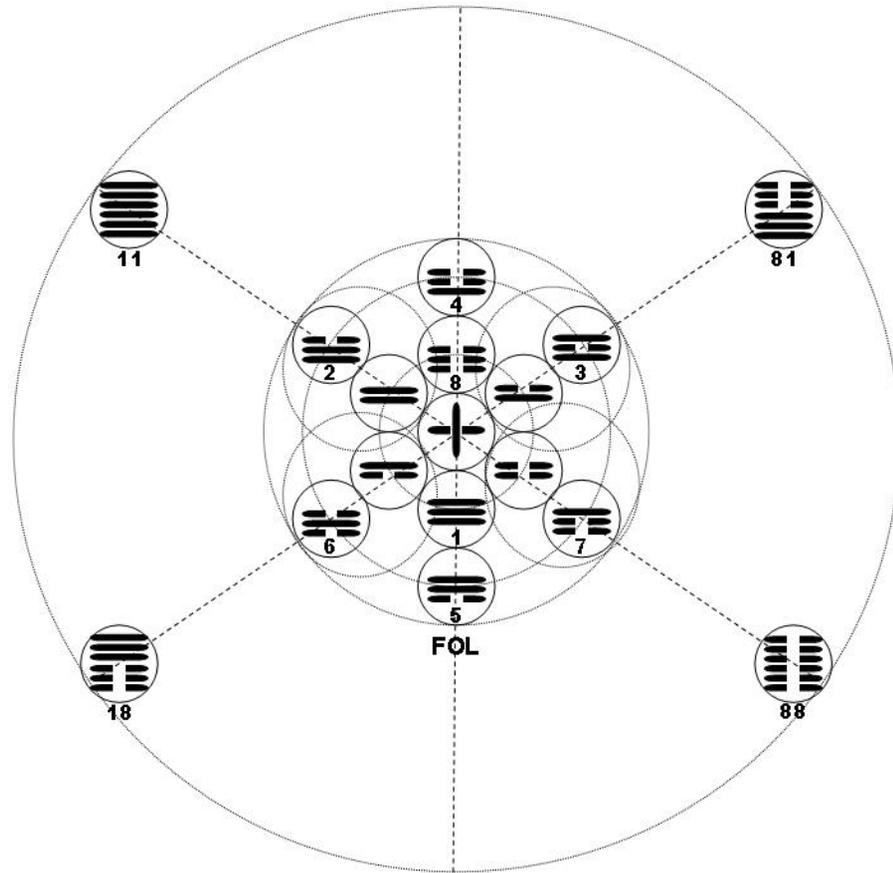
FOL が浮かぶ海とはすなわち 6 ページの混沌ですが、ここでいう混沌はたださまざまなものが雑然と入り混じった塊ではなくて、可能性がかたよりなく発生消滅をくりかえす海です。



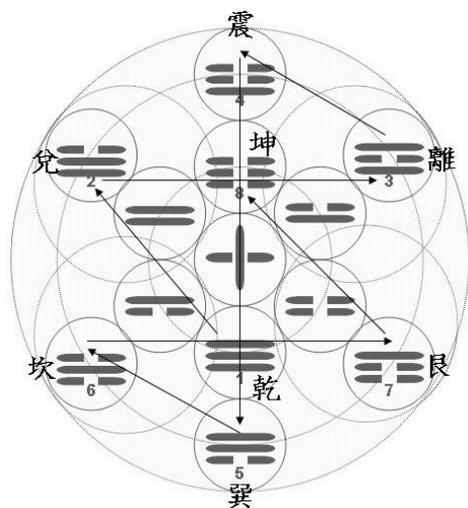
左ページの絵で、左上の全陽の大成卦（八卦とおなじ「11：乾」と呼ばれる）と、右下の全陰の大成卦（これも八卦とおなじ「88：坤」と呼ばれる）は対で、この海の波の山と谷の部分のような極点——基準的構成要素を象徴します。あるいはこの基準を基準軸、軸と呼んでもいいかもしれません。

一方、やはり左ページの絵で、右上の「8：坤（上卦）」と「1：乾（下卦）」でできた大成卦「81：泰（たい）」と、左下の「1：乾（上卦）」と「8：坤（下卦）」でできた大成卦「18：否（ひ）」も対をなして、上述の構成要素がかかわりあってできた結果、またはかかわりあう運動そのものを象徴します。これはまた、上述の基準軸を中心にしておこる運動——終わることのない舞踏であるということできるでしょう。

この終わりのない舞踏こそ、混沌の海での無数の差異の生成消滅や、後天動因図における——つまりすべてにおける運動、変化をひきおこす原動力です（左の絵）。



1.7 先天数



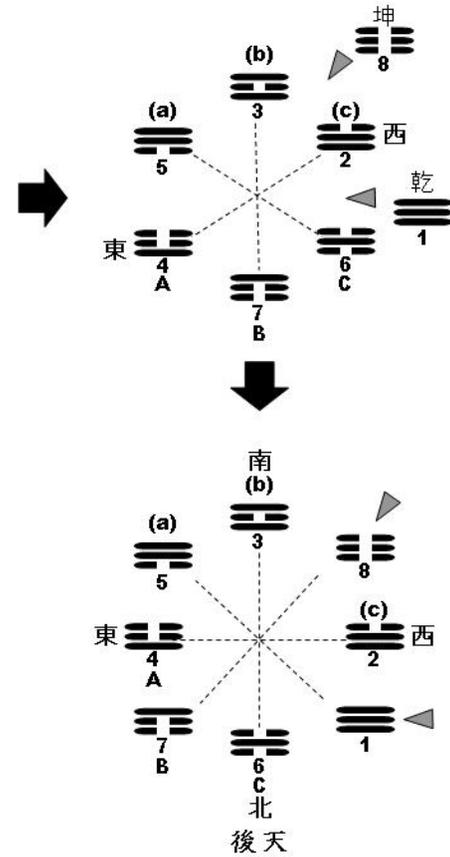
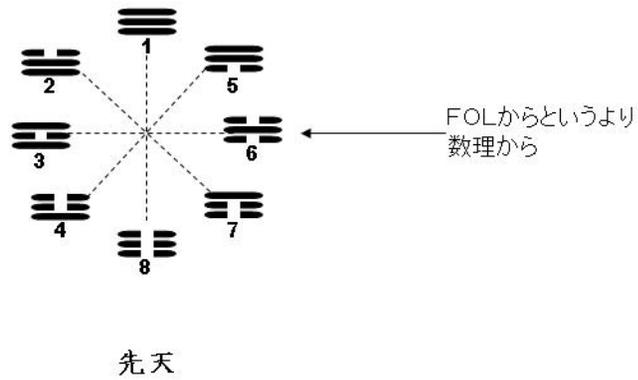
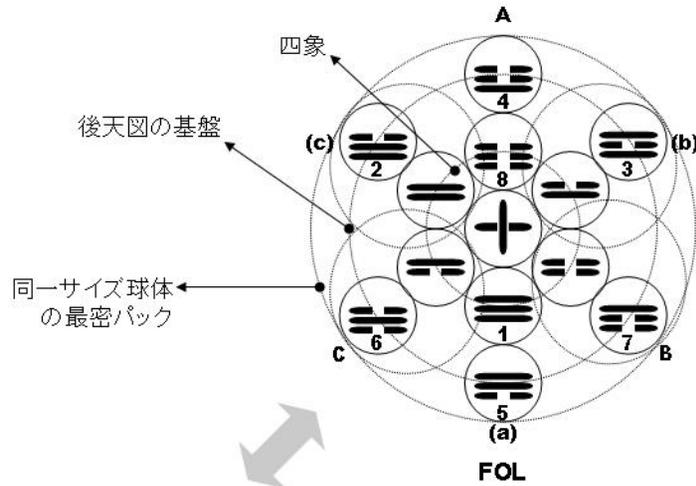
数、数えることがいかにして始まったか説明することや、数というものが人間（生命）の創作なのか先験的^{ア priori}に在るものなのか……こういったことを論ずるのは本書の守備範囲をはるかに超えることです。

ただ、原理的に考えて、数えることは差異を認めた後に起こることであるということができないのではないのでしょうか。均一の周囲（地）があつて（実態は均一ではなく沸き立つ可能性の海であることは15ページで触れました）、そこから区分できる差異（ある特定の可能性が選択された領域（図）が生じた後でなければ、数えようにも数える対象がないからです。地という海から、図という島が複数あらわれて初めて数をかぞえることができるようになります。

易という言葉では、最小限の差異は0か1か（陰か陽か）という二元的な符号である爻であらわされますので、易卦を数ととらえるならその記数法は基本的に二進数^{バイナリ}であり、位があがるにしたがつて増える数の上限は2、4、8、16……という2の累乗になります。

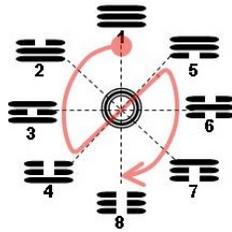
左ページのFOLの内側において八卦にふられた数を易では先天数または易数といいます。先天数は八卦を二進数として数えた結果であり、易の伝統によれば左ページに示した易卦と数の対応になりますが、位取りの方法や、0、1と陰爻、陽爻の対応などの定義により、1から8までの数と二進数としてみた易卦の対応は逆順にとることもでき

ます。本書では伝統に従った対応に則ります。左ページ四隅の大成卦をはじめとする後天動因図における大成卦につけられた番号は、その大成卦を構成するふたつの八卦の先天数を組み合わせでつくられたコード番号（5ページ）であり、大成卦全体をひとつの二進数とした場合の値ではありませんのでご注意ください。また、上の絵はFOL内における先天数の循環を示したものです。八卦にはこの先天数の順番でそれぞれ、「1：乾（けん）」「2：兌（だ）」「3：離（り）」「4：震（しん）」「5：巽（そん）」「6：坎（かん）」「7：艮（ごん）」「8：坤（こん）」という名前がついています。



1.8 先天図・後天図

伝統的な易には八卦を放射状に配した先天図、後天図という図があって、それぞれ易の原理を示した図とされています（[4] など）。左ページの絵では先天、後天と書かれた図です。周易などで実占に用いられるのは主に後天図ですが、梅花心易などでは先天図が重視されます。先天図も後天図も方位（あるいは時序）と八卦の対応を示しますが、それぞれ対応は異なります。



先天図の八卦の配置は易数にしたがった数理的なものです。数の順番は左回りから右回りへと途中でねじれていますが、このねじれによって、図上で向かい合う八卦はお互い各爻の陰陽を反転したもののどうしの対になっています。

一方、後天図の八卦の配置は先天図にみられるような数理的な整合性はみられないようです。後天図における八卦の配置は八卦の意味によって決められたものだからです。意味は観察者の主観がともなうため必然的に多義的です。したがって、なぜ八卦がこの配置かという説明はひとつとおりではありません。左ページの絵に示したように FOL をもとに後天図ができた、と、説明することもできるでしょう。

こういった先後天図の特質をふまえて、本書では先天図をこの宇宙を構成する世界の設計図、後天図を先天図の設計図により創られた世界を旅する生命の象徴ととらえることにしました。この文脈でいえば生命活動とは旅そのものということになります。

FOL は世界のおおもとというより、その世界を旅する旅人（生命現象）のおおもとといえそうです。数や数理は FOL から生じたわけではなく、FOL から生じた生命があたりをみまわしたときにその世界を認識するための普遍的な枠組みです。この枠組みが生命による創作なのか生命に関係なく予めあったものなのかは、17 ページで述べたようにはっきりしたことはわかりません。

2 旅

導入から始まってこれまでは、設計図——基盤となる概念についてお話してきました。

概念。

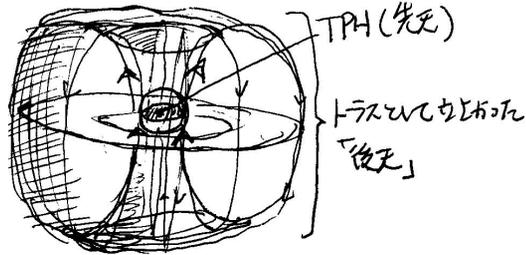
本書自体もそうですがすべては概念です。

実態は6ページに描いた（この絵自体も概念ですが）混沌です。

みかけ上、生命はその材料である「差異」という積み木を積み上げるために前の世代からパターンを引き継いで期間限定的にそのパターンを維持します。

生命は情報というバトンを次の世代に渡しながらか混沌という海から現れては消えていきます。

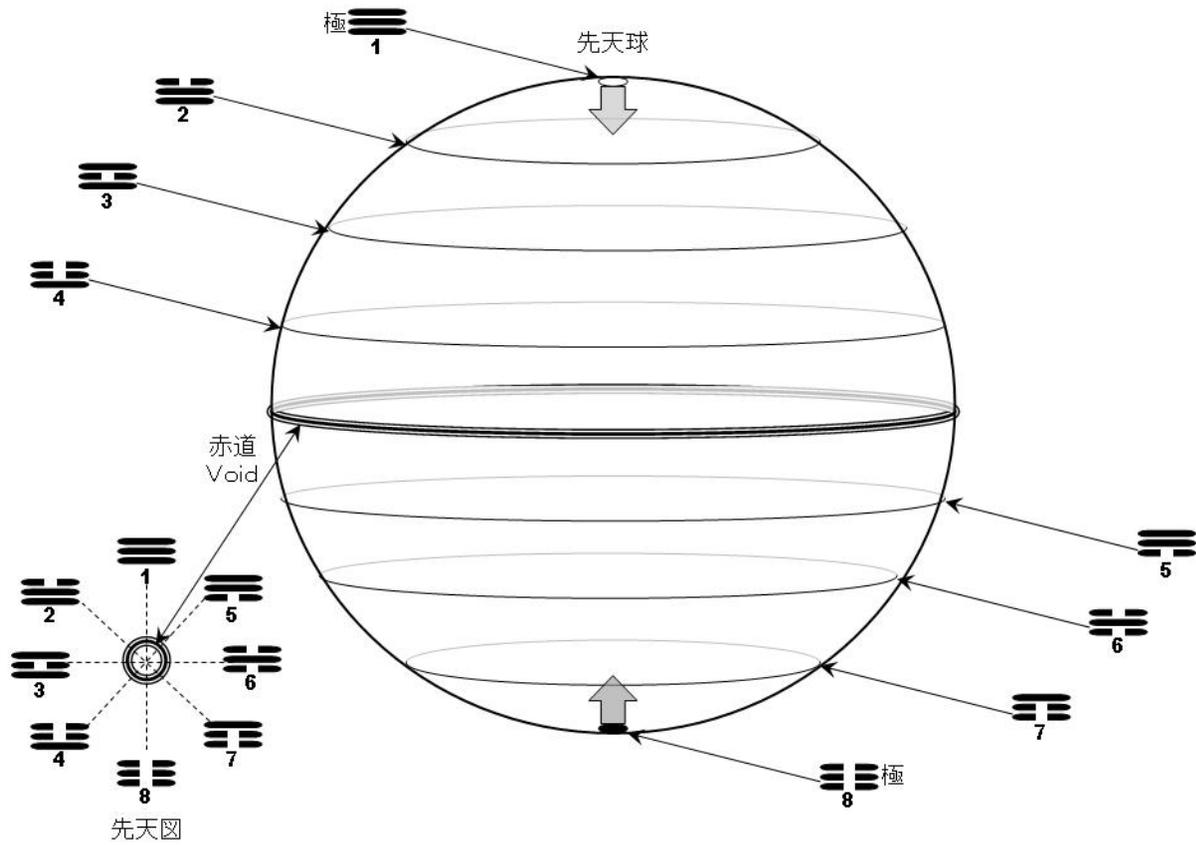
カギになる概念は先天図と後天図です。本書では、先天図は数理を、後天図はFOLを前提として立ち上がった概念であるとしたと思います。



トーラス（ドーナツ形）は至るところにみられる運動のパターンです。先天図、後天図に加えてトーラスも基本的な概念とすることにしました。

トーラスというカタチを、先天図、後天図という枠組みでできたネットワークで包み込むイメージです。

最終的にはこのトーラスの展開図が後天動因図になります。



2.1 先天球

球は高度に抽象的で完全です。

もちろんトーラスがそうでないということではありません。

抽象的で完全であるといえばあらゆる幾何学図形がそうですが、球（円）はすべての点を中心から等距離にあるという点で、ずば抜けて特別なもののように感じられます。

本書ではひとまず数理を象徴する先天図と球との対応をとって、トーラスが登場する前段階に置きました。

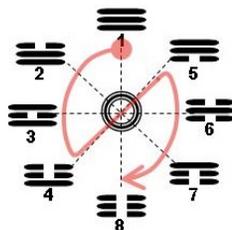
球はそのあと生じて来る生命が旅する世界——舞台の元型であるという位置づけです。

先天図における八卦と球との対応では、まず上の極点に全陽の「1：乾」を置き、下の極点に全陰の「8：坤」を置きました。

上の極から下の極まで赤道をまたいで等間隔におかれた緯線に易数順で残りの八卦を対応させました。

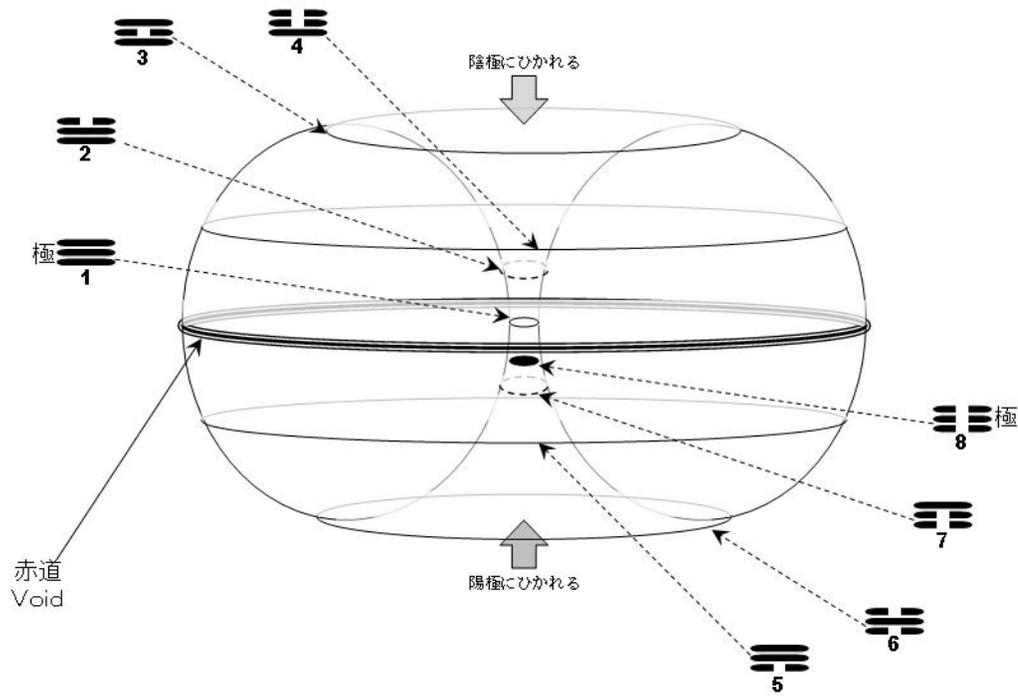
左のページにその様子を示します。

こうして先天図と対応をとった球を先天球と呼びたいと思います。



上の極から下の極へと先天球の緯線をたどることは先天図上で易数順に「乾兌離震巽坎艮坤（1 2 3 4 5 6 7 8）」とたどることと同じです。このようにたどると先天図上では「4：震」から「5：巽」へ向かうところで途中、図の中心を通ります。先天図上ではこれがゼロポイントになりますが、先天球上では緯度0度の最大径の緯線（すなわち球の赤道）になります。先天球におけるゼロポイントはこの最大径の緯線が描く円の中心（すなわち球の中心）ということになります。

球という形はたしかに完全ですが、八卦という重みを配当されるとそのままずっと完全で安定的にいるということができなくなります。特に、上の極に位置する「1：乾」——父と、下の極に位置する「8：坤」——母は強く引き合います。



2.2 トーラス

先天球の上の極と下の極に配された「1：乾」と「8：坤」は、その間を無理矢理引き裂かれた恋人どうしのように、互いに引き合います。

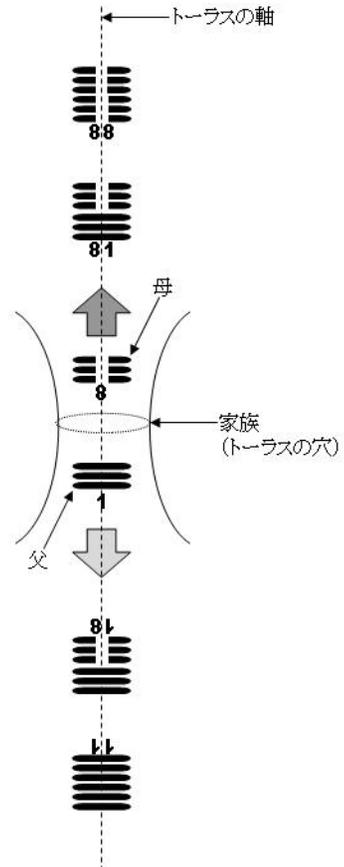
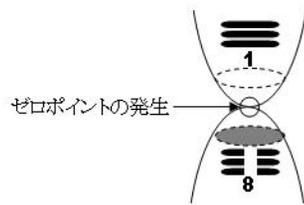
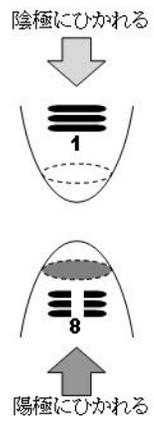
ここで引き合う力は陰と陽の異極どうしが引き合う力ですが、「1：乾」と「8：坤」以外の他の八卦も自分の爻の陰陽を反転した相手は必ずあります（「2：兌」と「7：艮」、「3：離」と「6：坎」、「4：震」と「5：巽」）。そういう意味では「1：乾」と「8：坤」以外のペアでも同じ力は働きますが、「1：乾」と「8：坤」はそれぞれの八卦を構成する爻がすべておなじ極性（全陰の「8：坤」、全陽の「1：乾」）を持つため、より強い力が働く、と、ここでは観ています。また、先天球上で特定の一点に位置して向かい合っているのはこの「1：乾」と「8：坤」のペアだけです（そのように配置したのですが）。

あまりすっきりした説明になっていないかもしれませんが、父と母は、出会い、引き合い、結婚するものだ、というのが一番シンプルな説明かもしれません。

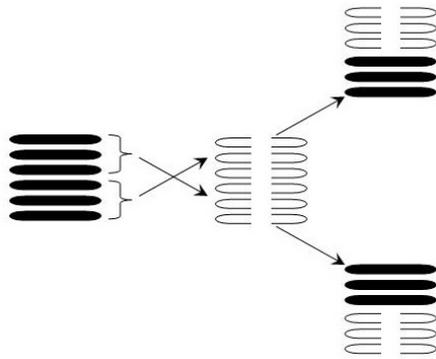
とにかくにも、「1：乾」と「8：坤」がお互い強く引き合うことにより先天球はたわみはじめます。

全陽の「1：乾」は下降し、全陰の「8：坤」は上昇し、先天球のゼロポイントを目指します。

先天球はそのままたわみ続け、ついには「1：乾」と「8：坤」はゼロポイントで接触するに至ります。



2.3 父母



陽気は下降し、陰気は上昇します。

通常感覚とは逆ですが、ここで強く働いているのは異極どうしが引き合う力です。

この力が陽気、陰気単体の運動性質にまぎっているわけです。

二元的な八卦である「1：乾」（全陽、男性原理）と「8：坤」（全陰、女性原理）は、たわみきって中心がくぼんだ先天球の中心で、ついに接触します。

たわんだ先天球の上の極（1：乾）と下の極（2：坤）の面が先天球の中心という一点で接触すると、そこにゼロポイントが発生します。

異極どうしが引き合う運動はここで終わりません。

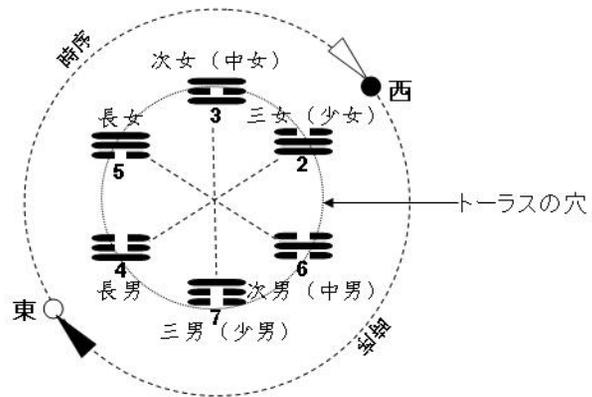
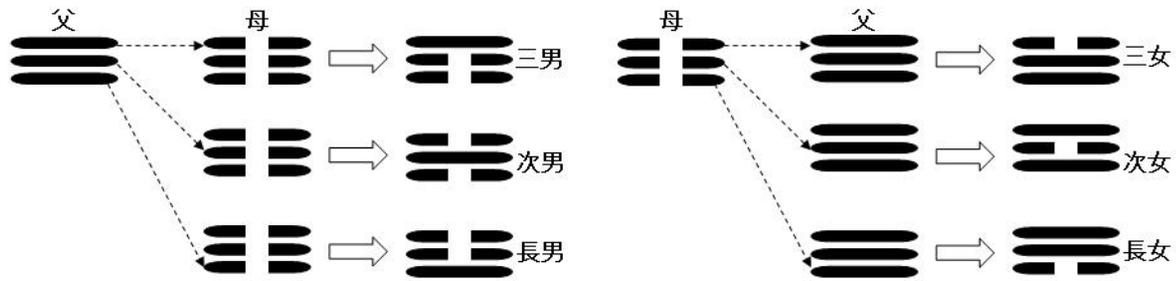
「1：乾」と「8：坤」はお互いの爻を交換し合って家族を創ります。

さらに「1：乾」と「8：坤」は、お互いの上下卦を交換し合って「11：乾」「88：坤」という基準軸と、「18：否」と「81：泰」という運動の象徴となる大成卦を生成します（左の絵）。

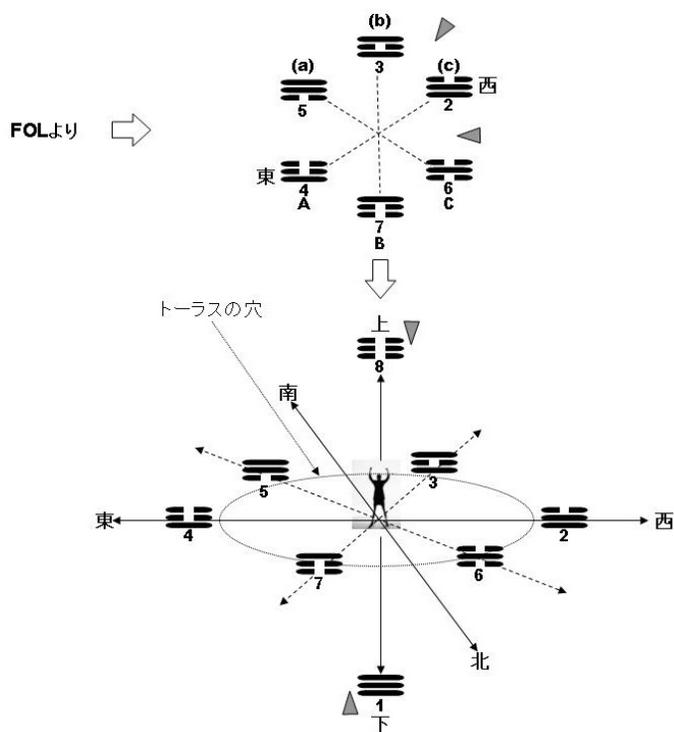
先天球の上下極が接触してできたゼロポイントという一点は、「1：乾」と「8：坤」が相互作用することにより、広がって、円——穴になります。

こうして球はトーラスになります。

ゼロポイントが広がることによってうがたれた穴は「11：乾（父）」「88：坤（母）」が交わることによってつくられた家族でできています。



2.4 家族



全陰の八卦である「8：坤」(母)と全陽の八卦である「1：乾」(父)が交わることによって、どのように家族ができるのでしょうか。

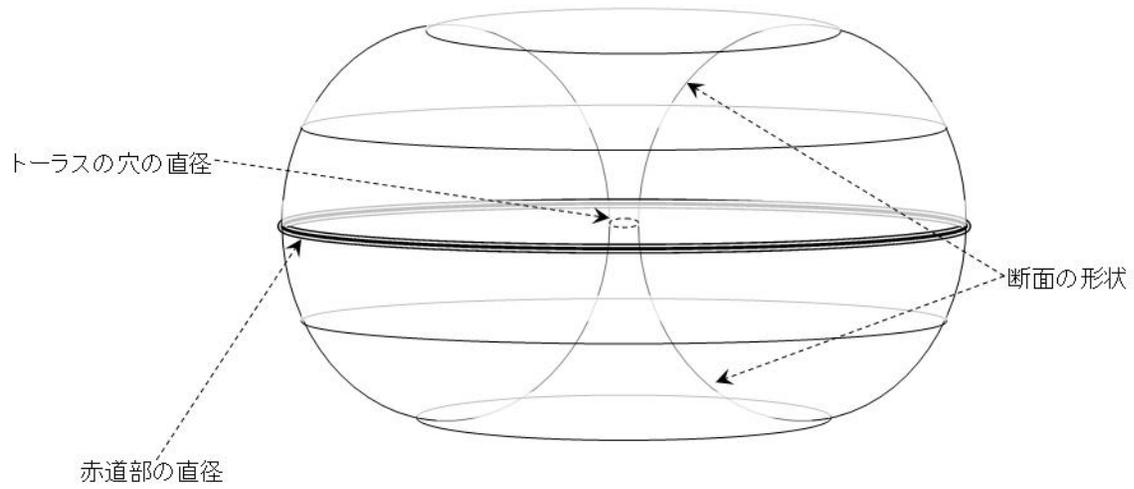
左ページ上半分の絵は、母(全陰の坤)というベースに父の陽爻が飛び込んで、それぞれ長男、次男、三男になる様子と、父(全陽の乾)というベースに母の陰爻が飛び込んで、それぞれ長女、次女、三女になる様子を示したものです。この過程は易経の説卦伝にもとづいたものです [1]。

左ページ下半分の絵はこうしてできた子供達が、トーラスの穴に配された様子を上からみた図です。時序と描きましたが、私たちがふだん感じる日常的な時間はここではじめて発生します。日常時間は地球の自公転——地上から見た太陽の移動と密接に関連しますから、空間的方位もここであらわれます。

「4：長男」「5：長女」「3：次女」「2：三女」「6：次男」「7：三男」を、この順番で、設計図であるFOLからの系統であるという表現を残しながら、本書流に「後天図」としてとらえなおしてみたのが左の絵です。

伝統的な後天図と異なるのは「1：乾」と「8：坤」を図の同一平面上から離し、それぞれ上と下に配したことです。本書ではこの二つの八卦はトーラスが浮かぶ空間(母体)の象徴である大成卦(乾、坤、泰、否。15ページ参照)を構成する八卦となっています。

トーラスの形状を決定する三要素



2.5 旅

左ページの絵に示したのはトーラスを構成する三要素です。

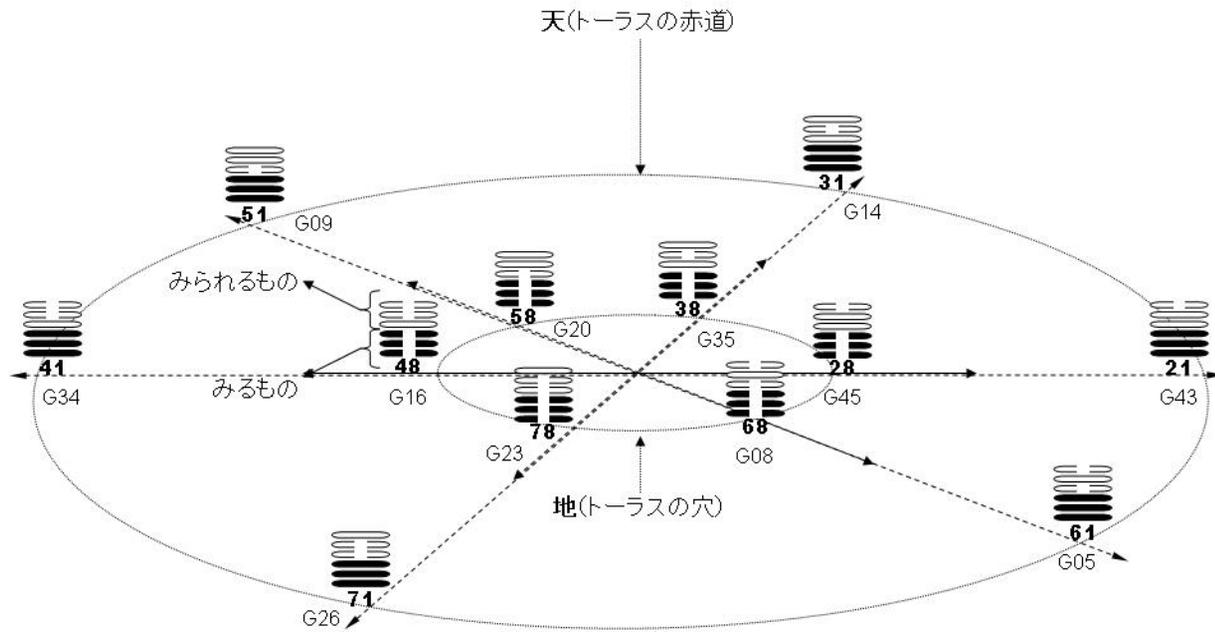
ここでいう三要素は数学的な定義ではなく、特に論理的に導かれたものでもありません。

では何を根拠にしたかというとは実は明確な根拠はありません。

ただ感覚的に、この3つの要素の大きさと形状が決まればトーラス全体の形状が決まるだろうと感じただけのことです……

そういつて開き直ってしまうと身もふたもないのかもしれませんが、とにかくにも、本節ではこの三要素にしたがってお話をすすめさせていただきます。

天地の形成



2.5.1 天地

左ページの絵は、中心のトーラスの穴とトーラスの最大径の径線である赤道が「1：坤」と「8：乾」を下卦とした大成卦で形作られる様子を示しています（「11：乾」「88：坤」「18：泰」「81：否」の4つはトーラスが浮かぶ海——母体（15ページ）をあらわすためのぞく）。

父（乾）と母（坤）は、子供達が旅する舞台であるトーラスの基礎として、そのトーラスの中心の穴と、最大径をもつ赤道である経線を創ります。

この円板は、計測可能な、私たちの住む宇宙における天と地を象徴しています。

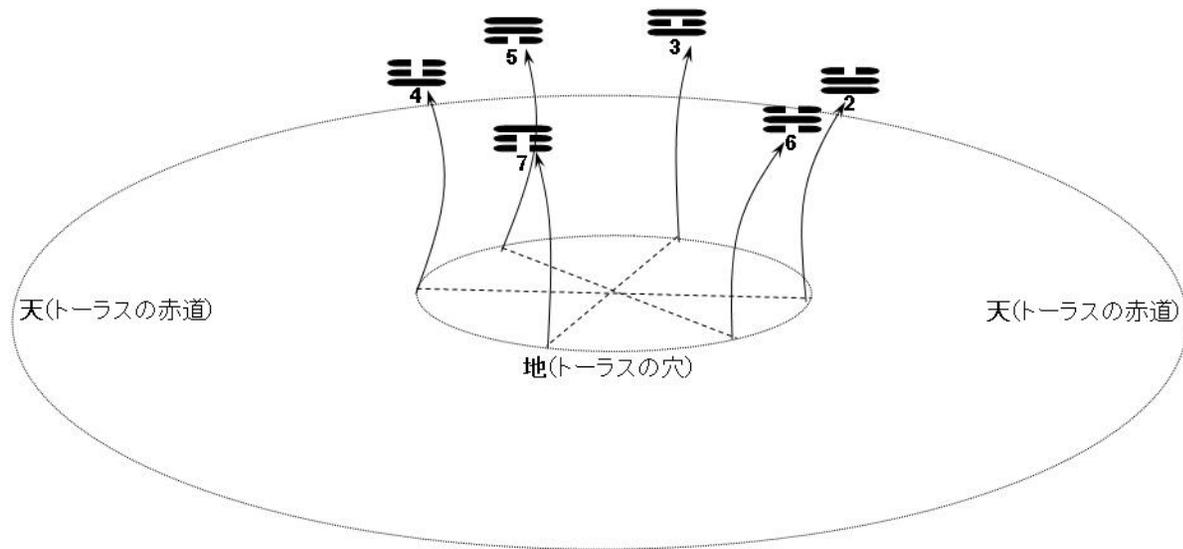
地がトーラスの穴の経線であり、天がトーラスの赤道の経線にあたります。

トーラスを構成する三要素のうちもっとも基本となる二つが、父母によって創られていることとなります。

左ページの絵には『みるもの』と『みられるもの』というコメントがありますが、下卦である父（または母）が、自分達が創った世界を旅する子供達を見守るという構図になっています。『みるもの』は黒色の爻で、『みられるもの』は白抜きの爻で示しました。

上下卦という関係でいうと下卦の方を基本、土台と観て、上卦は基本をふまえた上での応用、またはその土台に建つもの、と観ます。これに従い、後天動因図では、下卦＝みるもの＝主体、上卦＝みられるもの＝客体というふうにとらえることにしました。

息子、娘たちが旅に出る。



2.5.2 旅路

いよいよ子供達は家を離れ、旅に出ます。

その出立の様子が左ページの絵です。

子供達（「4：長男」「5：長女」「3：次女」「2：三女」「6：次男」「7：三男」）は、母（「8：坤」）によって創られた地を離れ、父（「1：乾」）によって創られた天を目指し、そこでなにがしかを得てふたたび地に戻ってきます。

こう書くと、いかにもあらかじめ設定された場所についていかえってくるだけの面白味のないパッキングツアーのように聞こえますが、トーラスを構成する三要素のうちのひとつである断面の形状はこの旅によって決定されます。

この旅はトーラスの形状——この宇宙の形状を具体的に定める旅でもあるのです。

旅は生命活動でもあります。

生命活動がこの宇宙のカタチを決めるとも言えそうです。

トーラスの穴——地と、赤道——天においては、『みるもの』と『みられるもの』の関係が33ページで述べた父母の場合と逆になります。

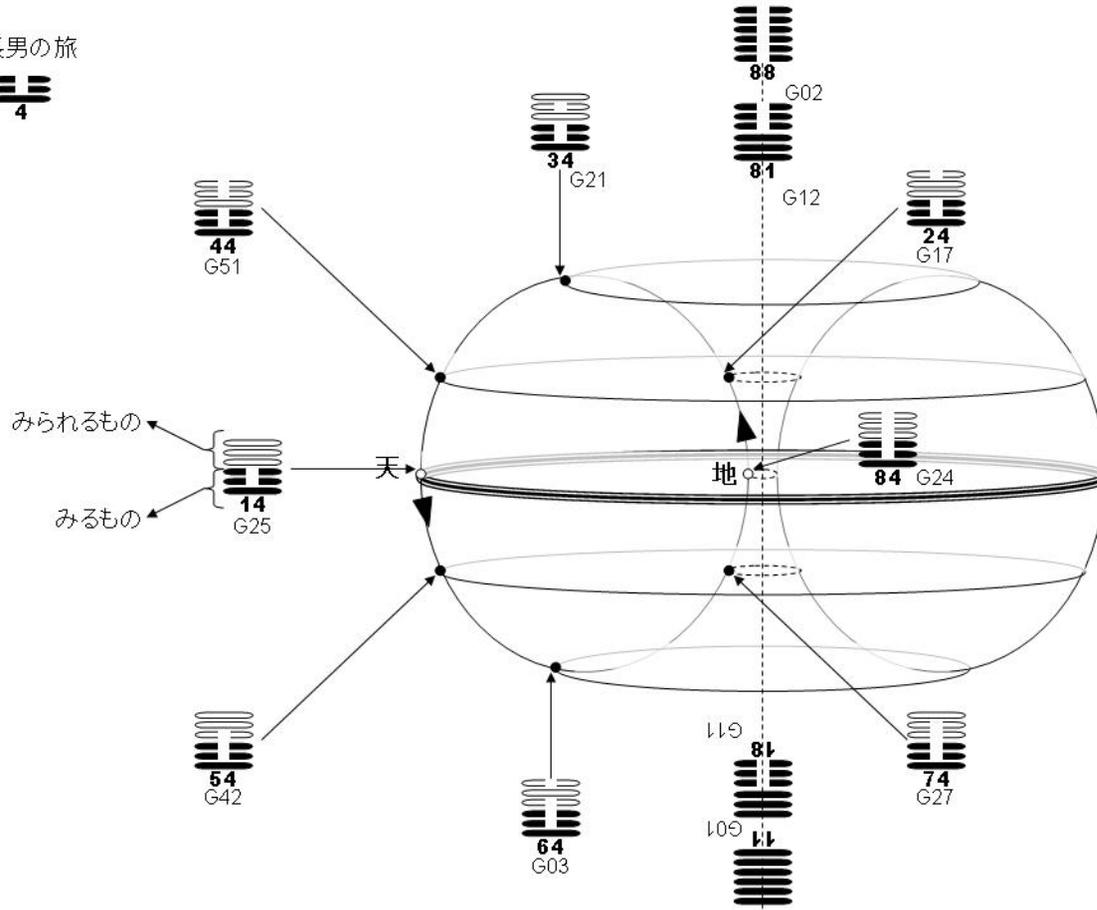
33ページでは父母が『みるもの』で子供達が『みられるもの』でしたが、今度は子供達が『みるもの』で、父母は『みられるもの』です。子供達が父母の仕事を見聞してまわるのです。

次のページから、子供達の旅を各々個別に絵であらわしてみました。

長男の旅



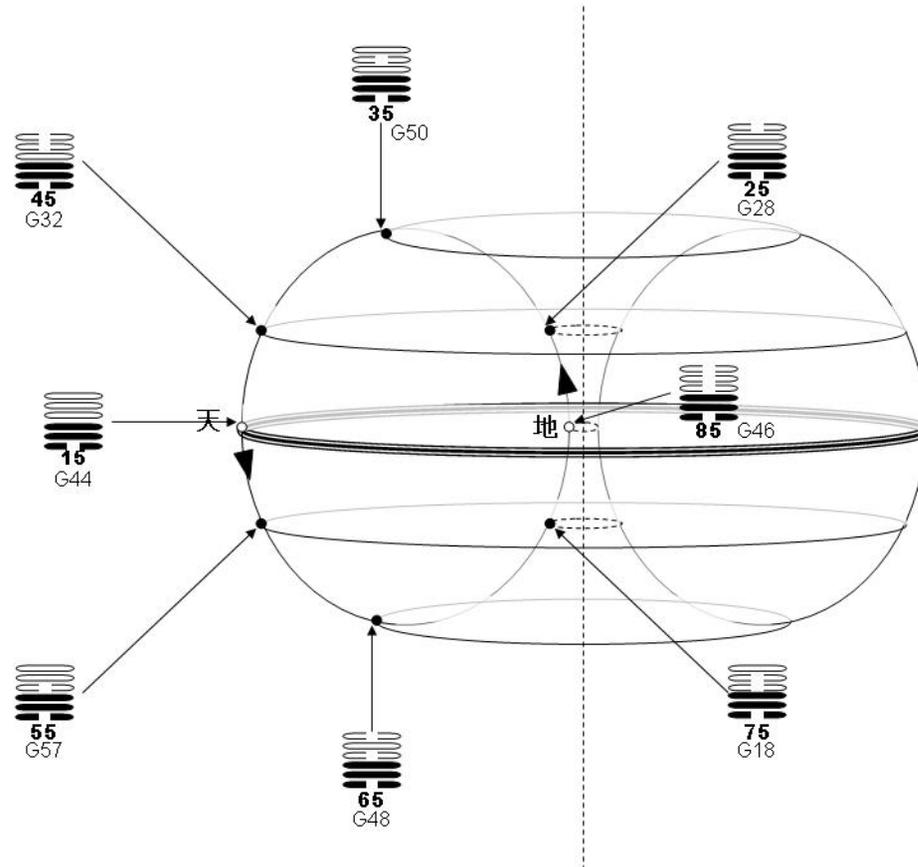
4



長女の旅



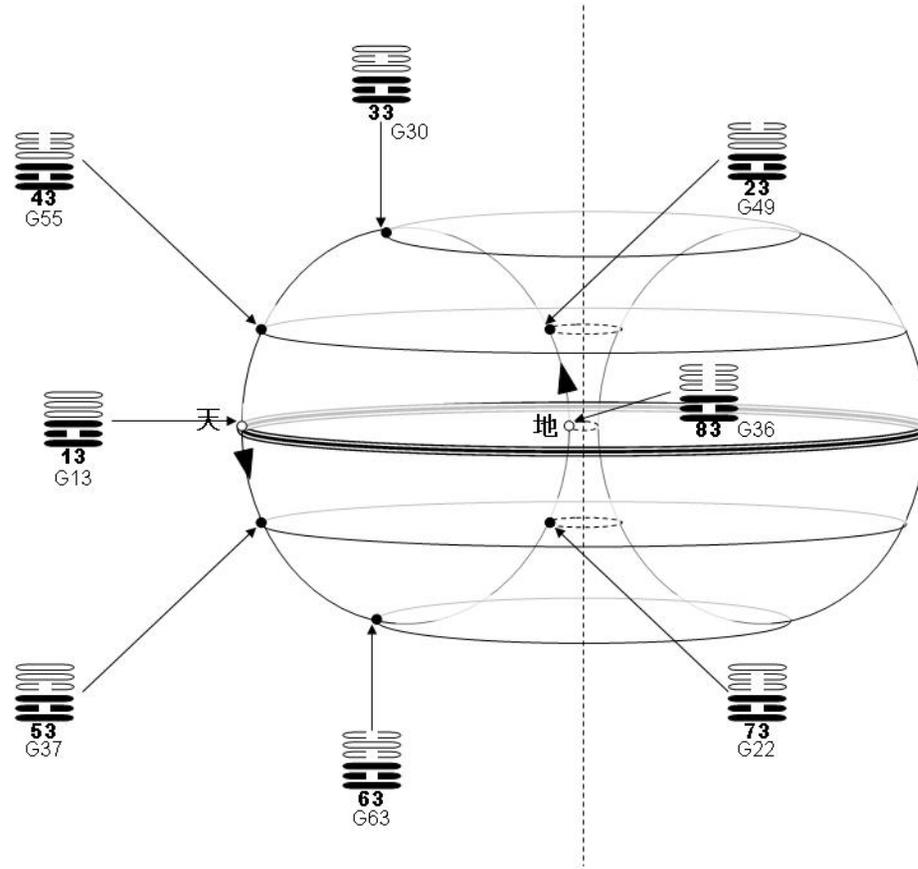
5



次女の旅



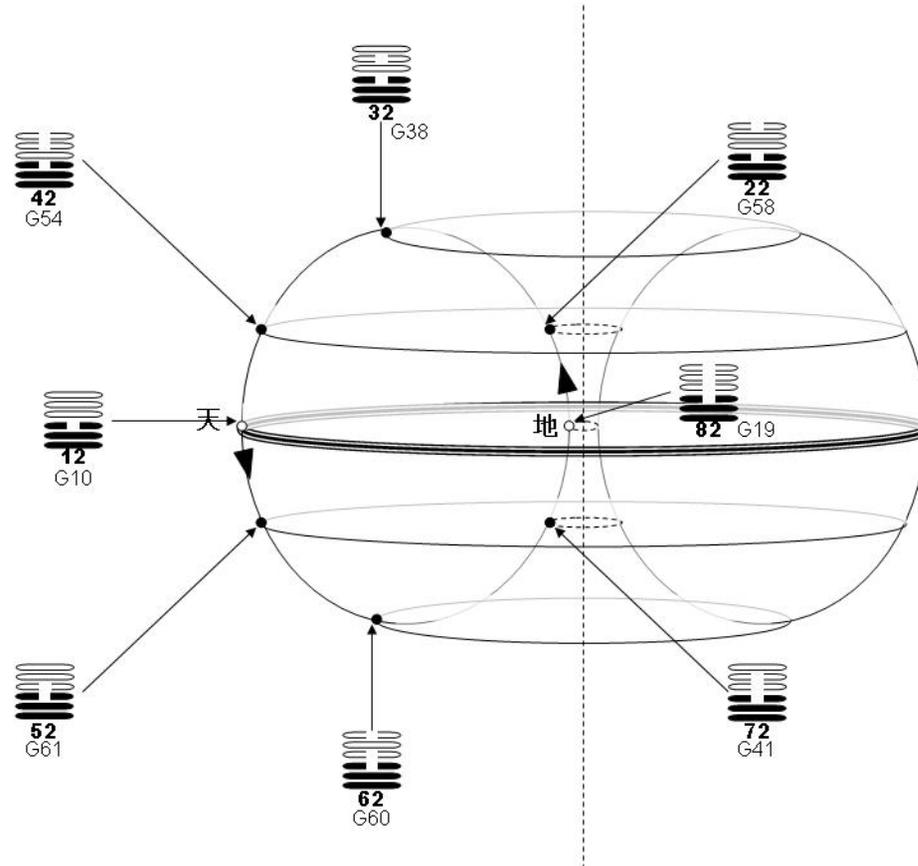
3



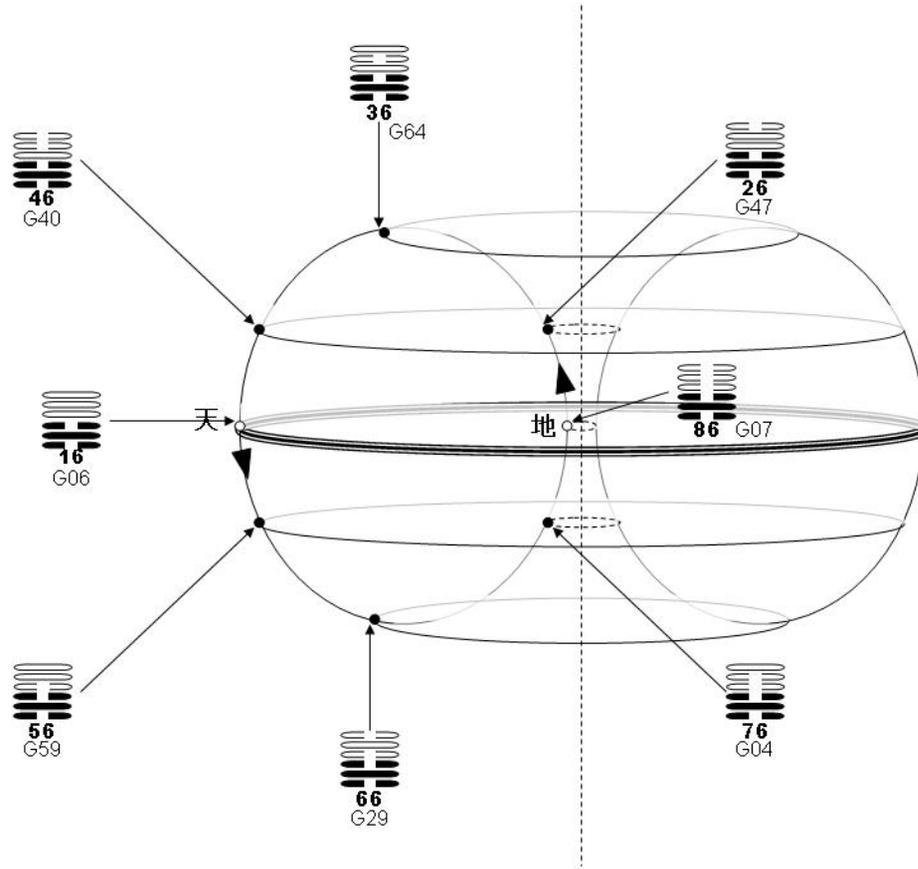
三女の旅



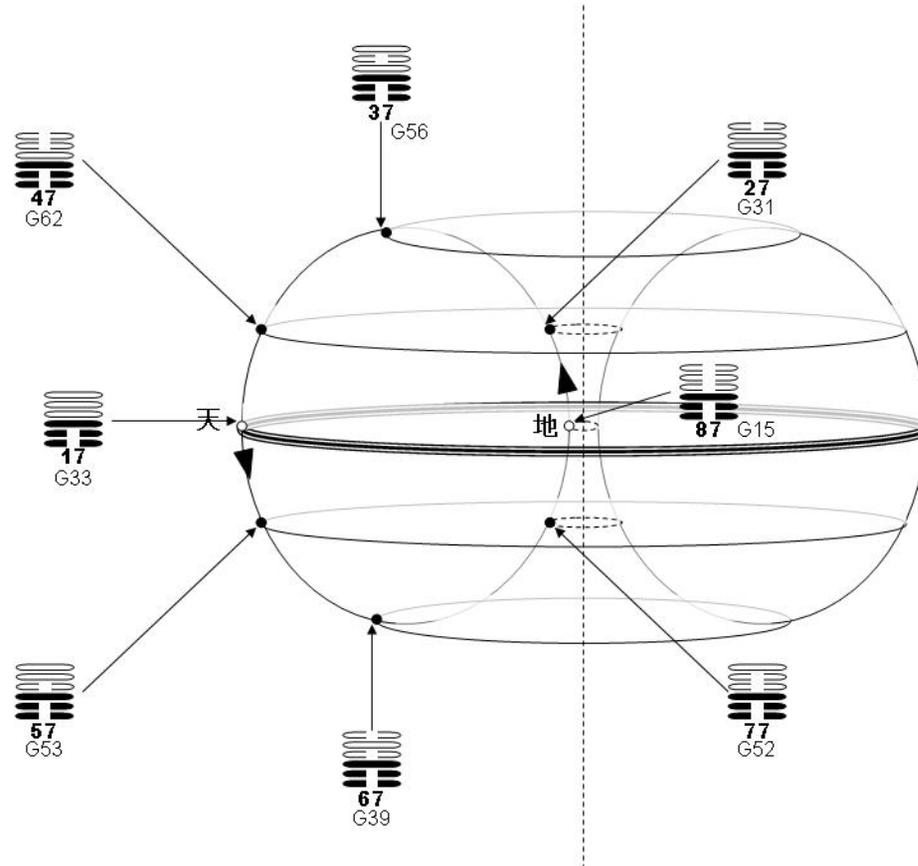
2

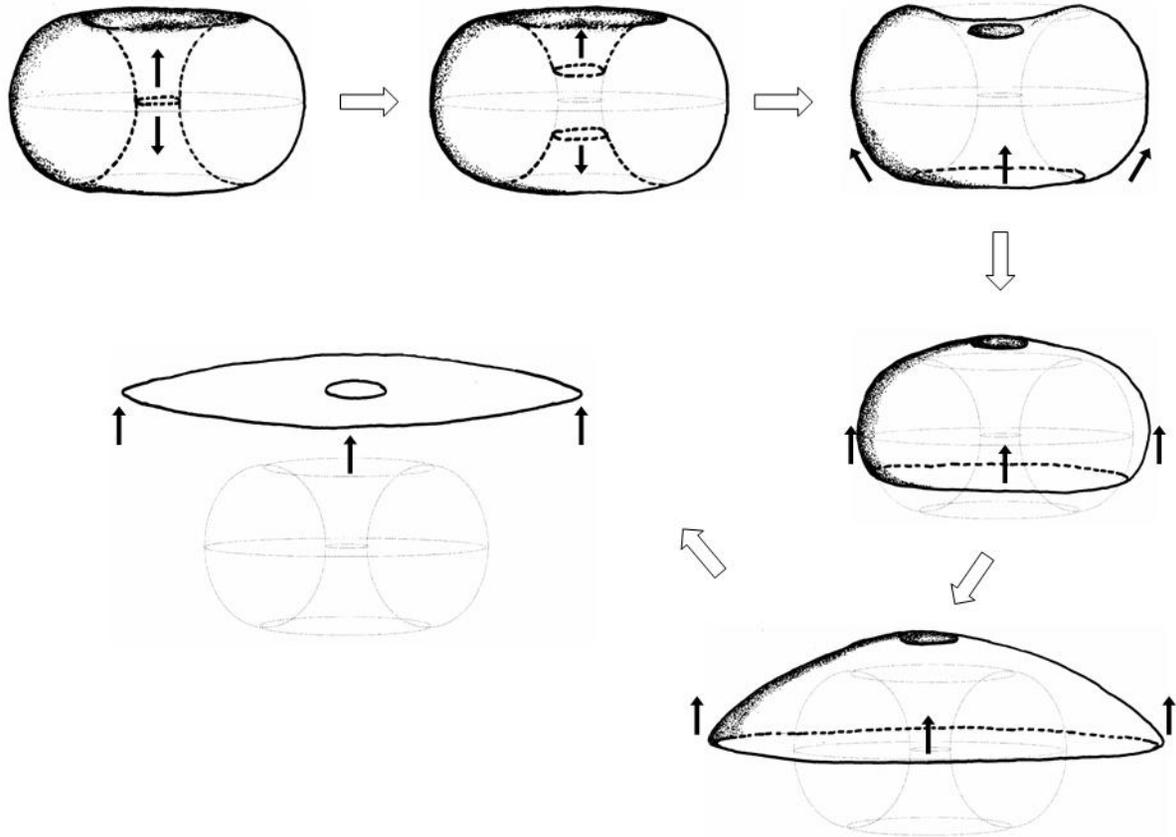


次男の旅

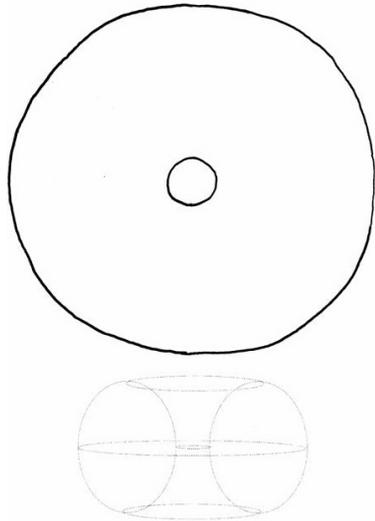


三男の旅





2.5.3 展開



36 ページから 41 ページの絵では、子供達がまったく同じ所を旅しているようにみえますが、実際にはトーラスの穴（地）から、後天図にしたがった6つの方向にそれぞれ散っていき、またふたたび家（地）へもどってくる過程を示しています。

この6方向への旅を一望のもとに見えるようにしたのが「後天動因図」です。

後天動因図は二次元の円ですが、トーラスは三次元立体です。トーラスという三次元立体をどのように円に展開したのかを示したの左ページの一連の絵です。

トーラスに「皮」があったとすると子供達はその「皮」の表面上を旅したことになります。その「皮」をむいて円になるように広げてやれば、子供達の旅を一目で見ることができるマンダラになります。

左の絵は、左ページの最後の円板を垂直に起こして、ページを見ているみなさんから見て円に見えるようにしたものです。絵はただの円で、中には何も描き込まれていませんが、ここには真ん中の円から外周の円にむかって放射状に配置された大成卦が配置されます。これがすなわち後天動因図となります。

ここまでで、5 ページで示した後天動因図上の大成卦の配置に関する説明が終わったことになります。

最後にひとつ大事なことをつけ加えておきます。

中心の円と外周の円は同じ場所——地をあらわしています。

天であるトーラスの赤道は中心の円と外周の円の間になります。

後天動因図上で中心の円から出て外周の円に向かってその半径上を旅するということは、地から出発して天に至り、再び地にもどるということです。

3 結び



当初は絵本のようなものにしようと思っていました。

ボリュームは最低限におさえて、できるだけ絵や図などのシンボルで満たした本にしようと思っていたのです。

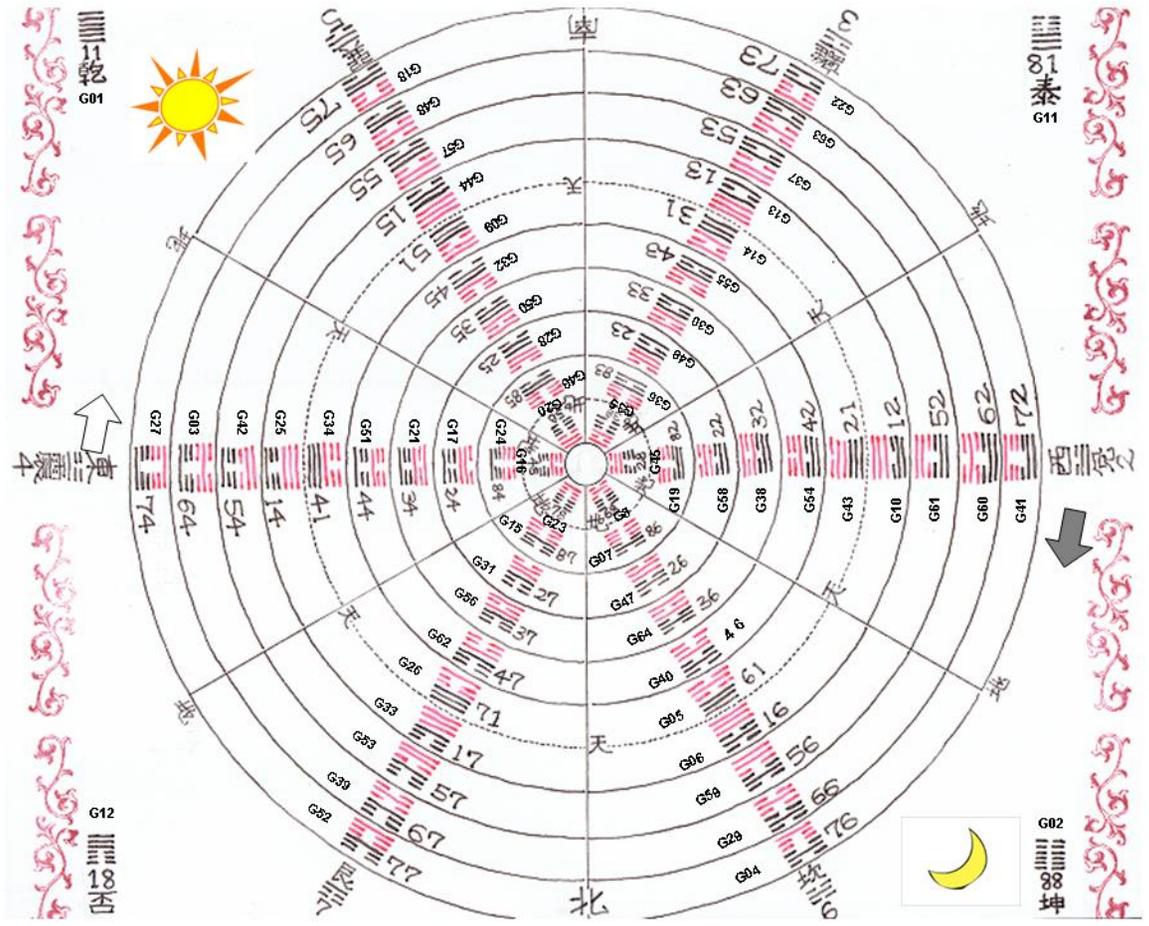
でも最終的には、ご覧になっているように、ボリュームも字数もかなりオーバー気味になってしまいました。

左の絵は、表紙の龍の白黒の絵に色を付けて眼を入れたものです。冒頭（3ページ）で書かせていただいたように、この本に書かれていることは白黒の絵のような枠組みです。まずは読み物ですので一読していただけるだけでも著者としては大感謝なのですが、もし、ここに書かれていることを「お使いになろう」とするなら、読者に色を付けていただかなければなりません。

ひとつひとつの大成卦は何にあたるのか。それを構成する上下卦とは何か。6つの方向に往って還るプロセスは何を意味するのか。父とは、母とは、家族とは何にあたるのか。

「使う」ためには、こういったことについてせめてアタリをつけておく程度のことはしておく必要があり、それはケースバ

イケースなのです。次節にその見当をつけるヒントになりそうなことをいくつか述べ、さらに積み残した事項を提示させていただいて、本書を終わりたいと思います。最後に常套句。このささやかな「枠組み」がなんらかのかたちで皆様のお供になれば、著者としてそれにまさるよろこびはありません。でもほんとうにそう思います。



3.1 応用

改めて、左ページの絵が後天動因図です。四隅には母^{マトリクス}体をあらかず大成卦が配され、子供達の旅は中央の円から外周の円へ六方向に展開しています。赤く描かれたのが上卦、みられるもの、客体であり、黒く描かれたのが下卦、みるもの、主体です。後天動因図の応用はとくに占術に限ることはないのですが、同図に使われているのが易の言語であり、易自身はまずは占いの書です。そのようなわけで、占術を軸に図の使い方のヒントになりそうなことをいくつか述べさせていただきます。

簡単にいうと、易という占いは問いをたてて64あるパターンの中から特定のパターンを無作為に選び出し、選んだパターンを、その問いの回答として読み取るというものです。であれば、回答として得られた^{パターン}大成卦が後天動因図のどこに位置するかを見極めることがまずは第一となるでしょう。後天動因図という地図における自分の位置を確定するということです。

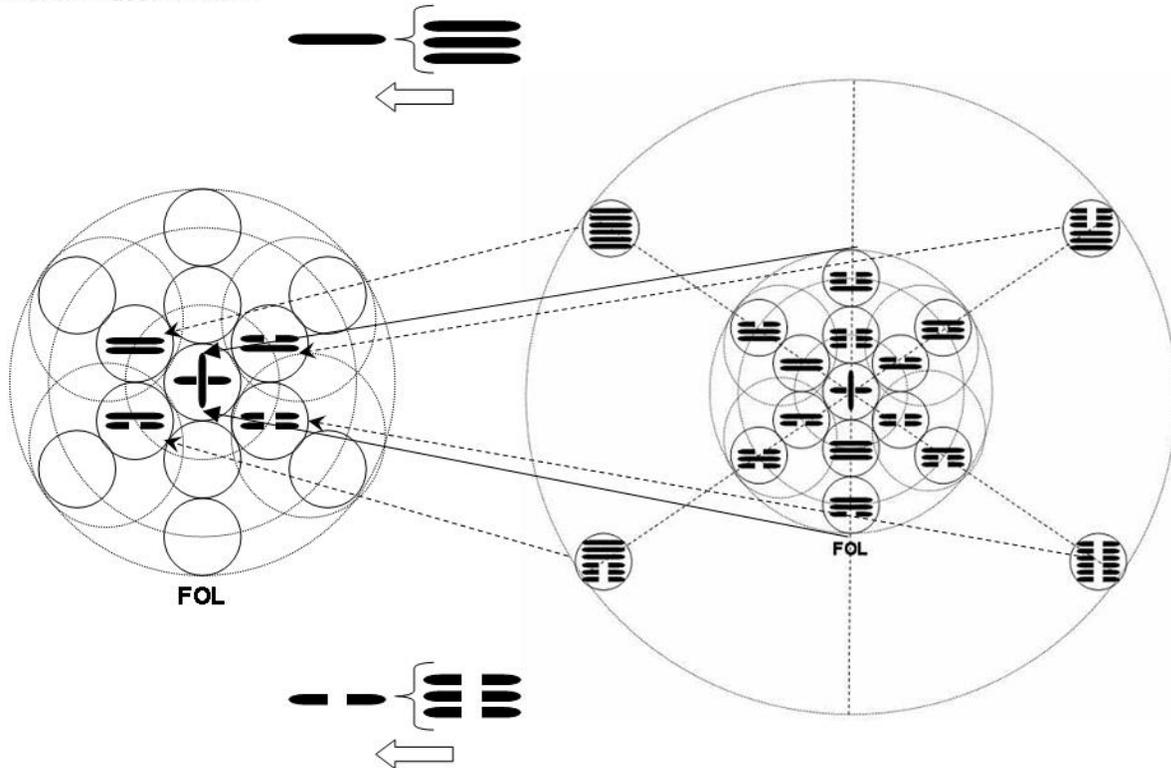
さて、特定の大成卦の位置を後天動因図上で確認することができたとして、前後左右の状況を確認していきましょう。前後、緯線方向に並んだ大成卦をみると、下卦は変わらずに上卦だけが先天図に従って変化していることがわかると思います。旅する主体に変化はなくその主体が眺める景色だけが変化しているということです。子供達の旅はこの方向に沿って進んでいきます。左右、経線方向に並んだ大成卦をみると、上卦は変わらずに下卦が後天図（29ページ）にしたがって変化していることがわかると思います。この場合は旅の景色に変化はなく、旅する主体の側に変化があるということです。さまざまな経験により旅人が景色を観る眼が変わるといったところでしょうか。時間はこの経線方向に右回りで発生します。これはまた年を重ねるといふことのメタファーのようにも観えます。ひょっとしたら旅は、緯線方向へではなく、経線方向への右回りの旅を積み重ねてトーラス全体を螺旋状にトレースして行くような道筋になっているのかもしれませんが³。

時間の流れについてはつけ加えておくことがあります。天地の経線を含めて後天動因図には8本の経線があります。時間はそれぞれの経線で右回りに発生します。眺める主体も眺められる客体（景色）も異なる8本それぞれの経線ではまったく異なる時間がそれぞれに流れているということです。

トーラスの中心にあたる最小径の経線がつくる地と赤道にあたる最大径の経線がつくる天には、旅する子供達が主体（下卦）となった大成卦と天地を設定した父母（乾坤）が主体（下卦）となった大成卦の双方が二重に配当されているので注意してください。

³斜めに動くと上下卦とも変化します。主体の意識が変わり、みられる景色も変わる。これがなにを意味するか興味深いところです。

フラクタルに折りたたまれる



3.2 フラクタルに折り畳まれる

ほんとうにあるのは母^{マトリクス}体だけです。

実体としてはこれ以外のものはなにもありません。

宇宙が宇宙自身を観るために仮にまとめられた複数の差異の複^{ユニット}合は生命と呼ばれ、本書の文脈では大成卦がこれにあたります。このユニットは期間限定のまとめりであり仮のものです。ひとつの大成卦は6つの爻で構成されますが、これが6つである根拠や必要性は実はどこにもありません。しかし私たちはこの6つの範囲内にある爻を「自分」と呼び、範囲外にある爻を「他」として関係ないものとみなすことをならいとしています。範囲内にある爻も範囲外にある爻も差異ということでは同等あるにもかかわらず、です。実際のところ、内と外の境界はまったく仮想的なものであり、いかようにも変更することができます。その仮想、見えない境界を設定することで、ものの観方、世界観——パースペクティブ、視座が生まれます。

14 ページの FOL の絵、後天動因図の設計図を境界をちょっと変えて観てみましょう。四隅にある母体をあらわす4つの大成卦は乾と坤という八卦で構成されていますが、この乾と坤という八卦をそれぞれ全体でひとつの陽爻、陰爻と観たててみるのです。

そうすると母体をあらわす大成卦は2つの爻で構成される易卦——すなわち四象になります。

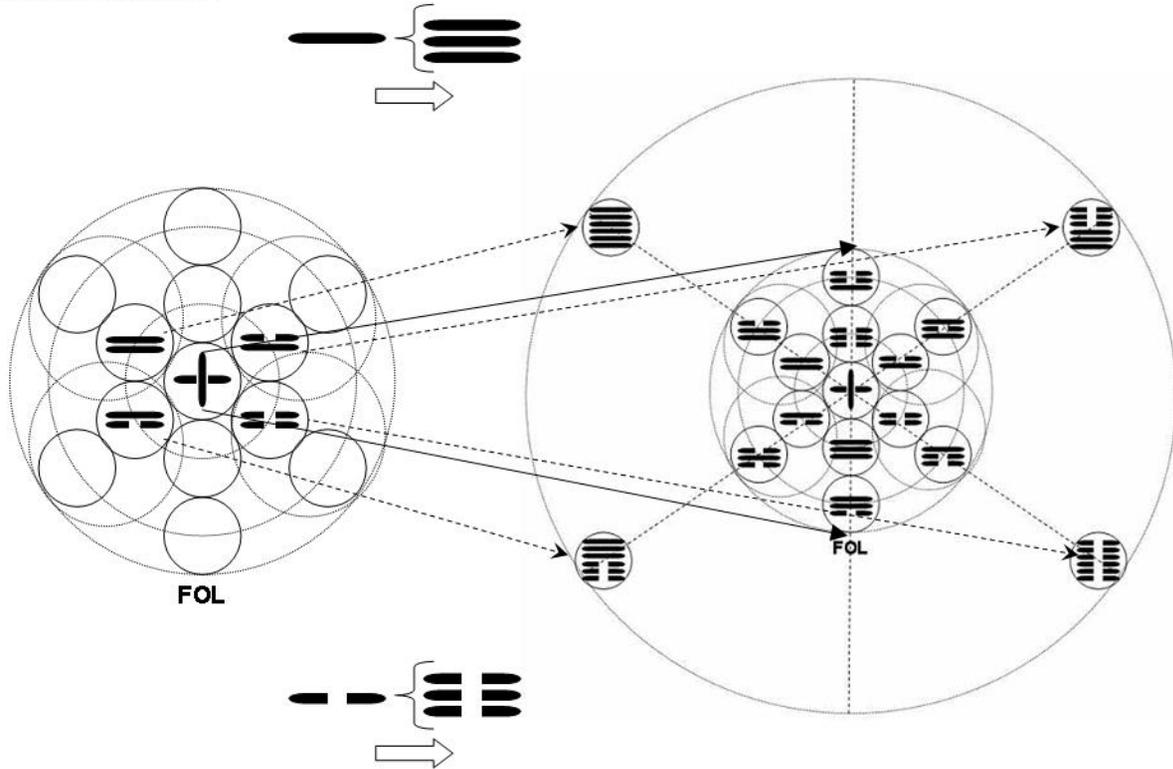
四象が取り囲むひとつの円。

この構図はそのまま、FOL の中心部の構成にあてはめることはできないでしょうか。

そのような対応をとるとするなら、FOL とそれを取り囲む4つの大成卦というマンダラはそれ自体、全体としてより大きな FOL の中心部として観なすことができます。

その様子を左のページの絵に示しました。

フラクタルに展開される



3.3 フラクタルに展開される

48 ページの絵では、3つの爻をまとめてひとつの爻と観なす方向を示しましたが、同じやり方で、ひとつの爻を3つの爻に展開する方向も想定することができます。その様子を左ページに示します。といっても矢印の方向が逆になるだけですが。

この拡大の方向と48ページの縮小の方向が示すのは無限大の方向と無限小の方向です。

そのどちらへ辿ってもFOLという同じパターンがあらわれ続けることを意味しています。

本書ではFOLは後天動因図の設計図という位置づけです。後天動因図はこの「FOL + 母体を示す大成卦×4」で示される設計図の上にたちあがります。ということは、後天動因図も無限大、無限小の方向にその設計図同様にたちあらわれるということです。

母体。設計図。後天動因図。いろいろ出てきました。

くりかえしになりますがほんとうに在るのは母体だけです。

設計図は母体の運動パターンであり後天動因図はその運動そのものです。

地（ホーム）から天（アウェイ）へ、そしてまた天（アウェイ）から地（ホーム）へ。

6つの方向へ向かいまたふたたびもどってくる止むことのないこの運動こそが、万物の本質・実態・在り様なのではないでしょうか。生きることも死ぬことも笑うことも泣くことも出会うことも別れることも、時にはたゆたうような、時には激しく翻弄されるような、この運動のうちにすべて織り込まれているのです。

ここには富む人も貧しい人も、搾取される人も搾取する人もいません。

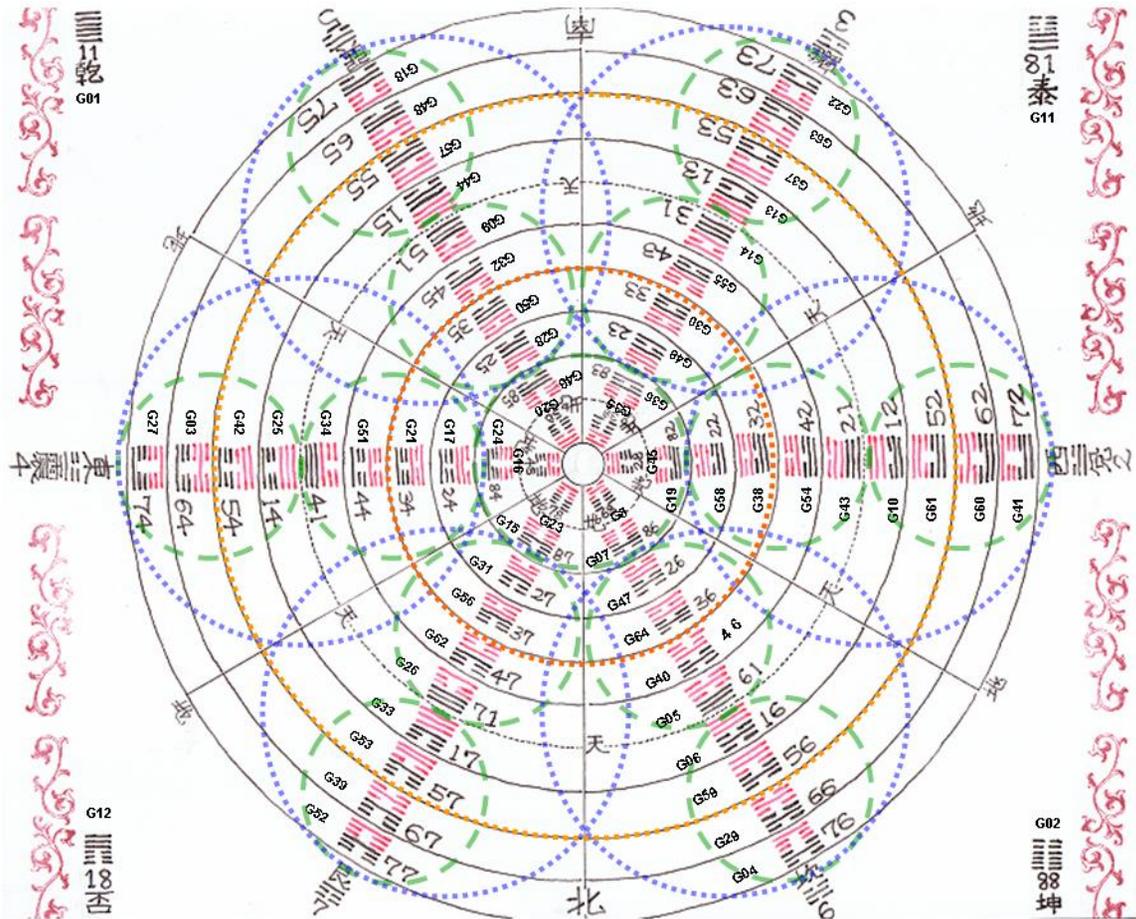
この大いなる流れの中では個人というものが何の意味も持たないからです。

虚しいヴィジョンでしょうか。

それとも心躍るヴィジョンでしょうか。

どちらにせよ、このうねるような運動以外のものは実は存在はしないのです。

現状の私たちがなんとか認めることができるのはおぼろげな特定のパターンだけです。



3.4 付録

後天動因図を描いて一息ついたあと、後天動因図自体にも FOL があらわれていることに遅まきながら気がつきました。

後天動因図はそれぞれ 10 の大成卦が六方向に配当された円形のマンダラですから、あたりまえといえばあたりまえなのですが FOL がうまく重なるようにねらって描いたわけではありません。

左のページにその様子を示します。

中央の小円に 12 の大成卦、その他の小円には 4 つずつの大成卦が入っています。

このように描くといかにもきれいにきちんとおさまっているようにみえますが、実態は差異の生成消滅をくりかえす混沌です。

6 ページの混沌では FOL は混沌の活動に埋もれてしまっていますが、左ページの絵では FOL が前面に出ているというだけのことで、結局は 6 ページの混沌と左ページの図は同じ「なにか」をあらわしています。

FOL や後天動因図は、その「なにか」を整然と観るための仮設的な単なる窓に過ぎず、**絶対的な原理や真理などではありません。**

索引

FOL, 9

陰, 5, 7

陰中陽, 11

易, 5

易卦, 5

易数, 17

卦名, 5

乾, 13

下卦, 5

爻, 5

後天図, 19

後天動因図, 5, 43, 47

坤, 13

コード番号, 5

三要素, 31

四象, 11

少陰, 11

小成卦, 5

少陽, 11

純陰, 11

純陽, 11

上卦, 5

世界観, 9

先天球, 23

先天数, 17

先天図, 19

大成卦, 5

地, 33

天, 33

認識, 9

八卦, 5

みられるもの, 33

みるもの, 33

陽, 5, 7

陽中陰, 11

老陰, 11

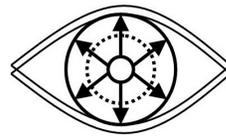
老陽, 11

ゼロポイント, 13, 27

参考文献

- [1] 高田真治、後藤基巳訳「易経」(上下) 岩波書店 2007 年
- [2] 中沢新一著「雪片曲線論」青土社 1985 年
- [3] 中沢新一著「森のパロック」せりか書房 1992 年
- [4] 中村璋八、古藤智子訳「周易本義」明德出版社 1992 年
- [5] ドランヴァロ・メルキゼデク著 脇坂 りん訳「フラワー・オブ・ライフー古代神聖幾何学の秘密」ナチュラルスピリット 2001 年
- [6] WingMakers LLC, 「Meditations in Time Space」an adventure to the inmost self, DVD 2003

「後天動因図」



V0.01 2022年 3月 25日
発行者 遊星出版
<http://athome.la.cocacn.jp/index.html>

